

学部における養成プログラム「特別支援教育」についての  
アンケート調査の報告

平成 28 年度「発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業  
(教職員育成プログラム開発事業)」  
(研究代表者：安井友康)

2017 年 2 月

北海道教育大学札幌校 特別支援教育専攻  
齊藤真善 安井友康

目次

はじめに	・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
I. アンケート調査の概要	・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
II. アンケート調査の結果	・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
III. まとめ	・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

**【資料】**

資料：アンケート調査票

はじめに

本報告は、平成 28 年度に北海道教育学部札幌校の講義「特別支援教育」（必修科目）において実施した「特別支援教育に関する意識調査」、及び講義終了後の事後調査の結果についてまとめたものである。

本講義開設の経緯については、平成 27 年度の報告書に記載したので、ここでは省略する。

## I. アンケート調査の概要

### 1. 調査の目的

平成 28 年度「特別支援教育」（必修科目）の受講者に対しアンケートを実施し、特別支援教育についての事前知識や障害児・者との接触経験等を把握することを目的とした。

### 2. 実施日

事前調査：2016 年 4 月 13 日（水曜日）。

事後調査：2016 年 7 月 27 日（水曜日）。

### 3. アンケート配布対象

平成 28 年度「特別支援教育」を受講した者 276 名（2～4 年次）。

### 4. 調査方法

事前調査：1 講目のガイダンス時に記入をお願いし、ガイダンス終了時に回収した（資料）。

アンケートは、平成 26 年度に兵庫教育大学に提出された池田悟氏の修士論文「教員志望大学生の特別支援教育の学びに関する研究」を参考に、若干の修正を加えて作成した。

事後調査：最終講義で用紙を配布し、後日、レポート課題と共に提出させた。

### 5. 実施主体

北海道教育大学特別支援教育専攻 安井友康 齊藤真善

### 6. 回収状況

全員回収。

## II. アンケート調査の結果

### II-1 事前調査の結果

#### ①回答者の概要

アンケート回収人数は276名で、第2学年の割合が特に多くなっている（表1、特別支援教育専攻に属する学生は、このうち22名であった。）。うち、男子学生は40.2%、女子学生は59.8%で、女子学生の受講が多かった。受講者の約2割が、特別支援学校教諭の免許取得を希望していることが分かった（表2、主免・副免の両方を含む）。

表1 各学年の人数（人）

	1学年	2学年	3学年	4学年	計
人数	2	239	28	7	276

表2 特別支援学校教諭の免許取得希望者の割合（%）

	あり	なし
免許取得希望者（%）	18.5	79.7

#### ②調査項目「I：特別支援教育の講義に関する質問」の結果

主な受講動機としては、必修科目のため「単位取得に必要なだから」とする回答が主なものであったが、「教員になってから必要になる」という意識を持っている学生も約4割程度存在することが分かった（表3、I-①）。講義で取り扱って欲しい主な内容は、「各障害に関する知識や理解」、「困難場面における手立て」であった（表4、I-②）。

表3 受講動機（%）

	特別支援養育に関心があるから	教員になって必要な知識だから	単位を取らないといけないから	その他
受講の動機	12.0	37.0	52.5	0.4

表4 講義で取り扱って欲しい内容（%）

	各障害に関する知識や理解	アセスメントの方法	困難場面における手立て	特別支援教育の歴史や制度	思いつかない・分からない
講義で取り扱って欲しい内容	39.9	8.7	41.3	2.2	5.8

③調査項目「Ⅱ：特別支援教育に関する認知度についての質問」の結果

表5の項目No1～10の障害種別に対する回答から、「視覚障害」「聴覚障害」「知的障害」「肢体不自由」については、「聞いたことがありかつイメージできる」者が多かったが、「自閉症スペクトラム障害」「学習障害」「注意欠陥多動性障害」といった、いわゆる軽度発達障害については「聞いたことがあるが、イメージできない」者が増加することがわかった。接触経験はどの障害種でも数値は低く、「知的障害」の30.8%が最高だったほかは、20%（五人に一人以下）を下回っていた。

次に、項目No11～26の基礎用語に対する回答から、「特別支援教育」、「特別支援学校」、「特別支援学級」の三つについては、「知らない」と回答した者はほとんどいなかったが、その他の用語については、学生間でばらつきが大きいことが分かった。「ICF」、「インクルージョン」といった福祉分野関連の用語や、「巡回相談」、「特別支援教育コーディネーター」、「校内支援委員会」といった支援の実務体制、他機関連携の存在については、ほとんど知られていないことも分かった。

表5 特別支援教育の用語に対する認知度の結果（%）

No	項目	理解している	聞いたことがありイメージできる	聞いたことがあるが具体的にイメージできない	知らない	接触経験がある
1	視覚障害	12.3	73.2	9.4	0.7	12.3
2	聴覚障害	9.4	74.3	10.1	0.7	17.4
3	知的障害	9.1	72.1	9.4	0.7	30.8
4	肢体不自由	10.5	76.4	6.5	1.1	17.4
5	病弱	6.9	54.7	31.5	2.9	7.6
6	言語障害	5.4	53.6	35.5	1.8	6.2
7	情緒障害	2.9	42.0	43.8	9.4	5.4
8	自閉症スペクトラム障害	4.7	43.1	40.9	7.6	12.0
9	学習障害	5.4	56.2	30.4	4.3	10.1
10	注意欠陥多動性障害	6.5	51.4	24.3	11.6	15.6
11	特別支援教育	7.6	60.9	27.5	2.5	
12	ICF(国際生活機能分類)	4.0	7.2	20.7	66.3	
13	ノーマライゼーション	10.5	24.3	47.8	16.3	
14	インクルージョン	4.3	12.7	29.0	53.3	
15	アセスメント	2.9	20.3	51.1	25.0	
16	個別の指導計画	6.9	33.7	39.9	18.8	
17	個別の教育支援計画	4.3	28.3	43.1	23.6	
18	校内委員会	2.2	12.0	39.9	45.3	
19	特別支援教育コーディネーター	1.4	17.4	41.7	38.8	
20	巡回相談	0.4	14.9	35.1	48.9	
21	知能指数	3.6	37.3	39.5	18.8	
22	通級による指導	5.1	30.4	29.7	33.0	
23	特別支援学校	18.5	67.8	12.0	1.1	
24	特別支援学級	20.3	67.4	9.8	1.1	
25	就学相談	2.9	36.2	42.0	18.1	
26	交流教育	2.2	23.6	37.7	35.5	

④調査項目「Ⅲ：特別支援教育の学びについての質問」の結果

特別支援教育について学ぶ必要性を感じている学生は約8割と高い数値を示したが（図3、Ⅲ-③）、具体的な学習方法については知らない学生が多いことが分かった（図2、Ⅲ-②）。特別支援教育の主な情報源は「講義」であり（図1、Ⅲ-①）、特別支援教育専攻以外の学生にとって、講義が唯一の学習機会となっていると言える。

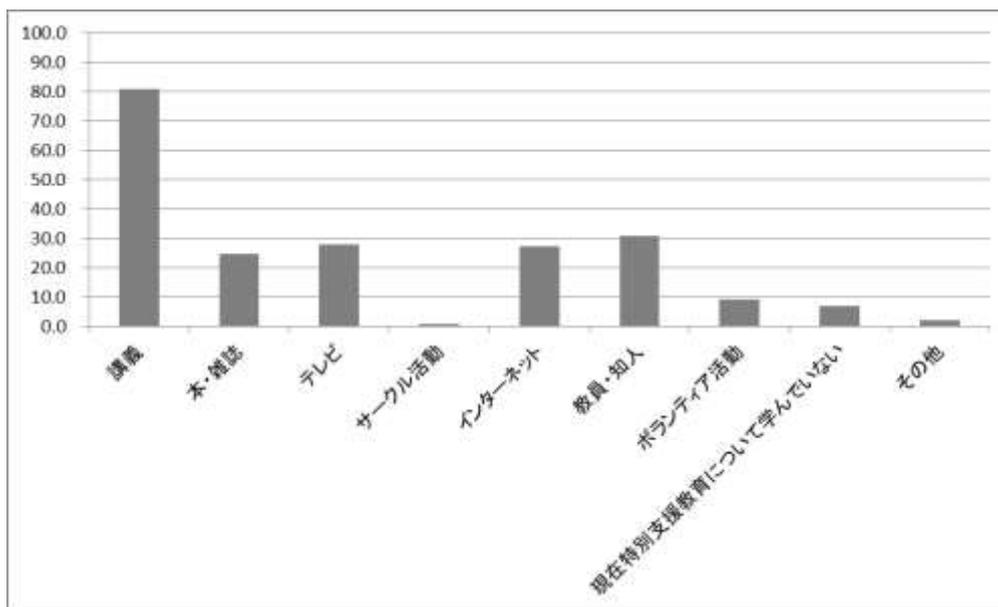


図1 特別支援教育を学ぶときの情報源

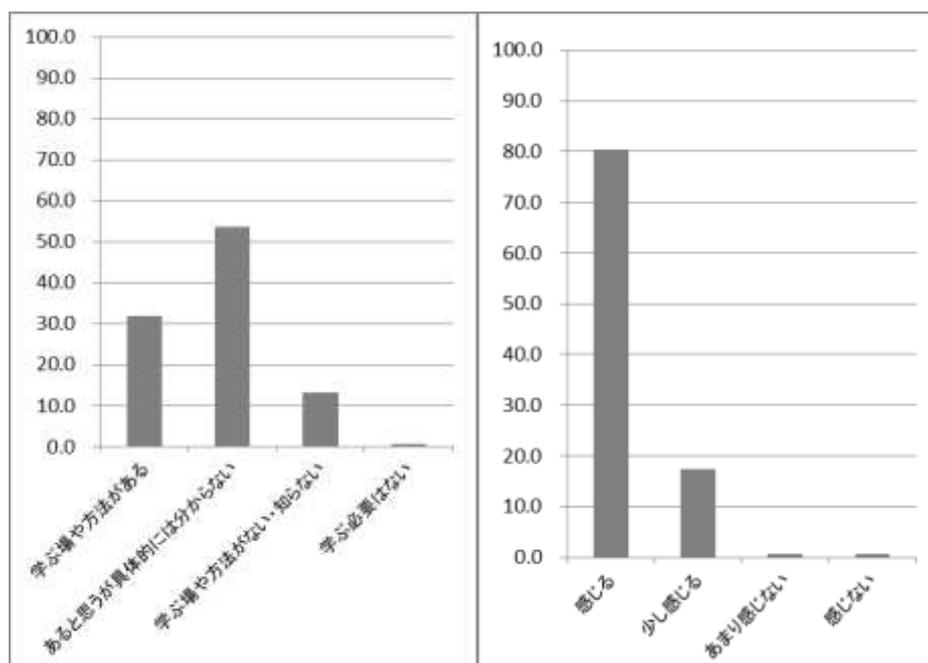


図2 学ぶ方法についての知識の有無

図3 学ぶ必要性についての意識

⑤調査項目「Ⅳ：障害児・者のイメージや接触経験についての質問」の結果

大学入学後、障害児・者のイメージが変化した者は、しなかった者の割合よりも多かったが(図4、Ⅳ-③)、「Ⅲ-①(特別支援教育を学ぶときの情報源)」の結果と同様に、そのきっかけは「講義」であることが分かった(図5、Ⅳ-⑤)。実際に障害児・者と接触し、関係性を深める中でイメージが変化したわけではないので、この結果は、あくまでも概念上の変化として考えるのが妥当であると思われた。

障害を持つ児童・生徒の担任になることへの抵抗感の有無については、「少し抵抗がある」が約半数を占めていた。障害者との接触経験、指導経験のない学生の実態を考えると、回答は妥当であると考えられた(図6、Ⅳ-⑥)。

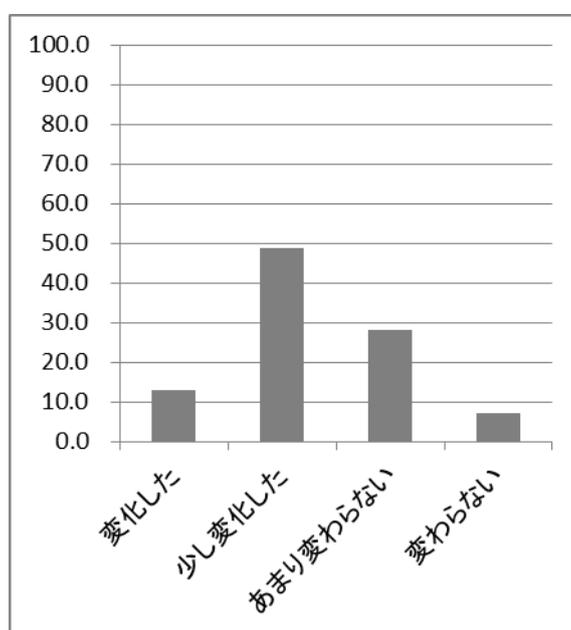


図4 大学入学後の障害者へのイメージの変化の有無

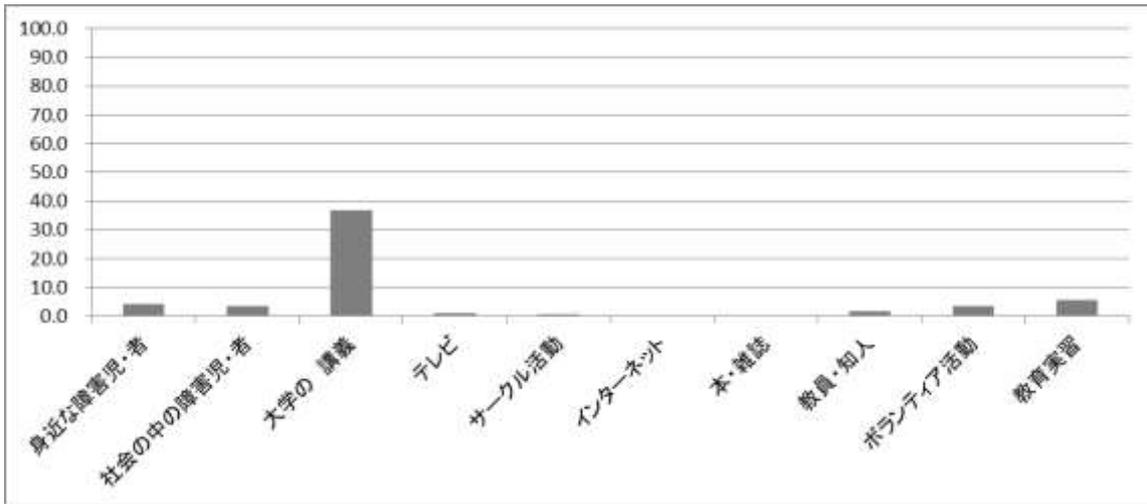


図5 障害者へのイメージが変化した契機・要因

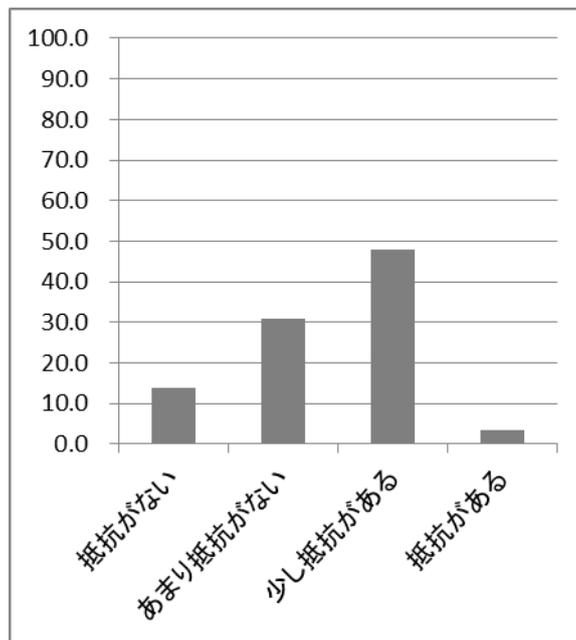


図6 障害をもつ児童・生徒の担任となることへの抵抗感の有無

## II-2 事後調査の結果

事後調査では、事前調査の項目の内、Ⅲ-③「特別支援教育を学ぶ必要性」、Ⅳ-⑥「障害を持つ児童・生徒の担任となることへの抵抗感の有無」の二項目について、再度回答を依頼した。ただし、事前調査Ⅳ-⑥で用いた「抵抗」という言葉を、事後調査では「自信」に修正した。図7（Ⅲ-③）より、

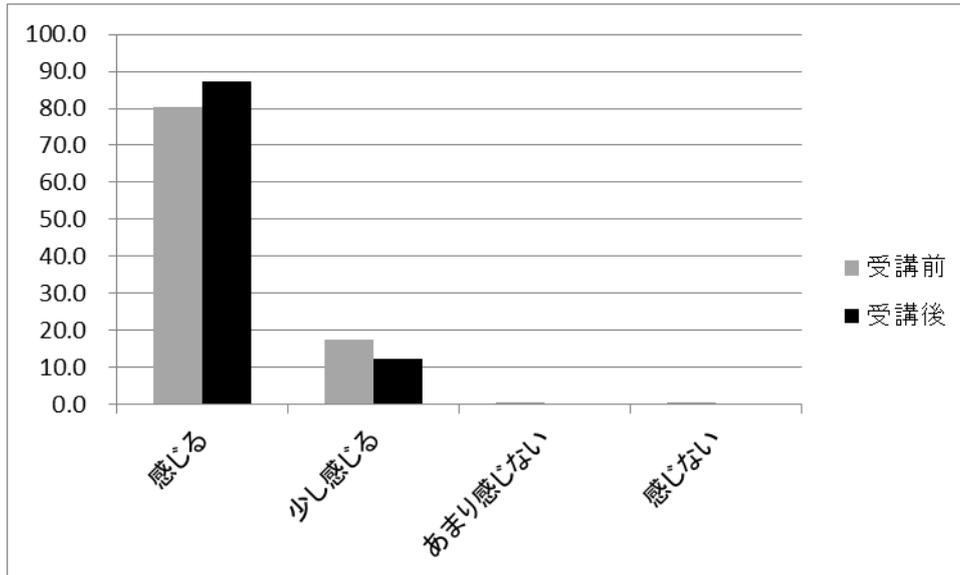


図7 特別支援教育を学ぶ必要性についての意識

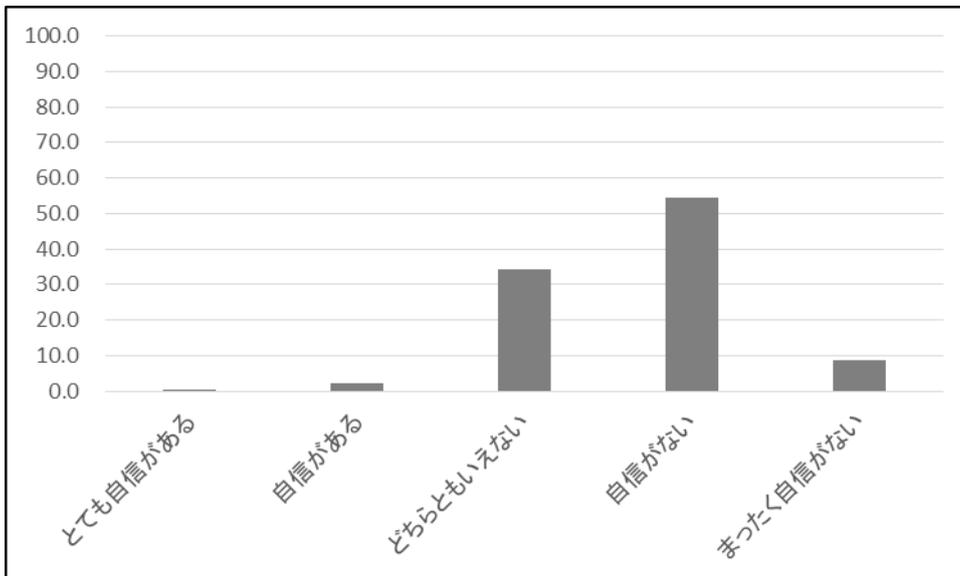


図8 障害をもつ児童・生徒の担任となることへの自信の有無

### Ⅲ まとめ

徳田ら（2005）によれば、障害理解は、以下の五つの段階を経て発達していくとされている。

- ①気づきの段階：差異に気づき、それに対して興味を持つ段階
- ②知識化の段階：差異を持つ意味を知り、障害の原因、病状、障害者の生活、障害への接し方、エチケットなどの広範囲の知識を学ばなくてはならない段階
- ③情緒的理解の段階：第二段階の知識化の段階と並列され、障害児者との直接的あるいは間接的な接触を通して障害者の機能面での障害や社会的な痛みを心で感じる段階
- ④態度形成の段階：第二、第三段階を経て、適切な認識（体験的裏付けをもった知識、障害観）が形成され、障害者に対する適切な態度ができる段階、
- ⑤受容的行動の段階：生活場面での受容、援助行動の発現の段階にあたる。即ち自分たちの生活する社会的集団に障害者が参加することを当然のように受け入れ、また障害者に対する援助行動が自発的に表れる段階

障害理解教育とは、これらの段階を促進していく教育であるが、

田口ら（2012）による教員養成系の大学生を対象とした調査によると、小学校高学年をピークに中学校、高等学校と年齢が上がるにつれて障害や障害者に関わる体験は減っていくことが明らかになっている（図9）。つまり、教員養成系の大学生は、大学入学後の講義等で初めて障害に関する知見を取得することになるのが現状である。障害に関する深い理解が求められている次世代の教育者が、障害児・者と直接関わる機会が大学のカリキュラムにおいてしかないという現状を鑑みると、接触機会を補償できるようなカリキュラム内容を検討していく必要があると言える。学生たちを、③情緒的理解の段階や④態度形成の段階に成長させるためには、講義と実習・演習の関連付けが、体系的かつ密接にならないと、その効果は見込めないと考えられる。

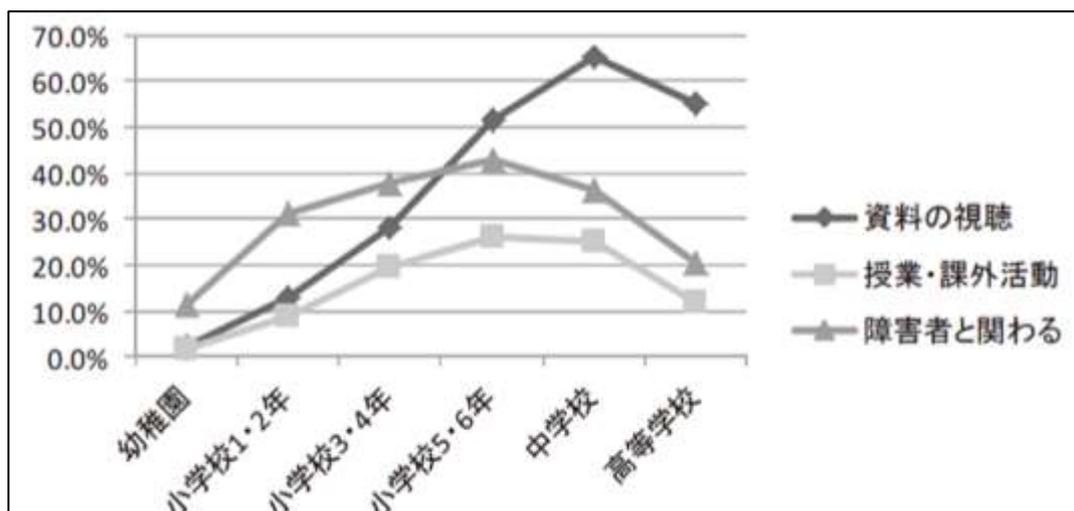


図9 障害や障害者に関する経験をした時期（田口 2012）

ここで「本質と非本質の区別の困難さ」の事例に対する、ある学生の模範回答を紹介する。教育相談事例：「複数の人に『・・・をきなさい』『次は・・・をしてください』『あれはどこへやったの？探して！』といっぺんに指示された時にヒステリックな声で『そんなにできない！』と叫んでしまう自閉症スペクトラムの子どもがいました。教師としてどのように対応するか答えなさい」に対し、ある学生の回答は「基本的には、誰か一人（ここでは教員）が様々な人が持っている意見などをとりまとめ、一つずつゆっくりと中継してあげることで対応する。また、あらかじめ「三つ以上の要求をしない」と約束をして生活させる。その上で、「様々な人があなたのことを見て、『こうして欲しい』と思うことがたくさんあって、それが不幸にも、同時に来ちゃうこともある。ひとつずつならあなたができることを先生はよくわかっているから、困ったら先生のところに合図を送ってね」と言う。もし、合図が来たらすべての意見をルールに従って伝える」というものであった。この対応方法は、自閉症スペクトラム障害の特性に応じた対応であり、かつ他のクラスメートにも実践可能な点で、現場で役に立つアイデアであると評価できたので紹介した。この模範回答を読んだ他の学生からは、「自分とは違う考え方だ」、「自分が教師になったらそういう発想ができるだろうか」などと講義後に感想が述べられ、自己の考え方を相対化するきっかけになったようであった。しかしながら、上記の学生のような、妥当性のある回答を行った者は、毎回約1割未満に留まっており、やはり講義を聴くだけでは、当事者の困り感を理解することはできても具体的に対応方法を想像することは難しいことがわかる。なお、妥当な解答を行った学生のほとんどは、指導経験（家庭教師）、支援経験（ボランティア）があった者たちで、このことは実践経験によって本当の理解が深まっていくことの証左といえよう。

最後に、平成27年度、及び平成28年度のアンケート調査を振り返って、今後の課題について三点まとめる。

①まず学生にとって、特別支援教育が新しい学問分野であることの難しさがある。特別支援教育は、教育、医療、福祉、心理等の領域を含む学問であるが、これらの領域は、高等学校までの教育課程では、ほとんど扱われることはないので、受講者に対し、基礎知識や概念をいつどのように伝達するかが課題となる。このことに関しては、本学には多領域の教員がいることを生かし、教育、医療、福祉、心理領域の教員が連携して、講義内容の体系化を図ることは可能である。多分野の教員による協同が今後必要であろう。

②障害のある児童生徒との接触経験を全員に補償することは可能かという課題がある。日本の教育制度においては、学齢期早期から、障害者と区別された環境で学習が行われるため、必然的に接触経験がほとんどない学生が多い。本学のカリキュラムでは、教育実践フィールド科目や教育実習で現場での実践的な学びを行うが、発達障害の児童生徒と出会うかどうかは確かではないし、たとえ支援や指導に従事したとしても大学教員が直接にスーパーバイスできる体制にはなっておらず、単なる体験にとどまっている可能性は否定できない。事後調査の結果に見るように、学生たちの自信を高めるためには、実践力を高める必要があるのであるが、そのためには学生の体験をマンツーマンでフォローできる体制が必要になる。もしくは、ボランティア・実習後の講

義も開設する必要があるのかもしれない。2年生時で抱いた様々な疑問・不安が、実習等の体験を通して実体化されたあと、教師として現場に赴く前にもう一度、体系的に学ぶ機会があれば、学生たちの理解はより深まるのではないかと考える。

③教育委員会等の機関と連携して、教員採用後の研修と連続したプログラムを構築する必要性がある。学部教育だけでは、徳田（2005）らの掲げる障害理解教育を完成させることはそもそも不可能である。大学のカリキュラムのみに閉じた発想ではなく、教師の学びは生涯継続すると捉えて、教員生活の全体過程において大学のカリキュラムが担うべき養成内容を再度位置づける必要があるのではないかと考える。

#### 引用文献

池田悟（2014） 教員志望大学生の特別支援教育の学びに関する研究 兵庫教育大学 平成 26 年度修士論文

田口禎子・林安紀子・橋本創一・池田一成・大伴潔・菅野敦・小林巖・三浦巧也・戸村翔子・松村綾子 教育実践研究支援センター（2012） 通常教育教員養成における特別支援教育プログラム構築のための基礎的な検討—教師志望大学生の障害理解と障害理解教育に関する調査 東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ 63 303-319

徳田克己・水野智美編（2005） 障害理解—心のバリアフリーの理論と実践— 誠信書房

【資料】 アンケート調査票

## 特別支援教育に対する意識調査

これは、本講義を受講する大学生を対象とした、特別支援教育に対する意識調査です。  
ご記入いただいた回答や記述内容については秘密を厳守し、研究目的以外には使用いたしません。  
ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

該当するものに○をつけてください				
学年	1	2	3	4
性別	男		女	
専攻(分野・グループ)				
特別支援学校教諭免許状の取得を希望していますか？	はい		いいえ	

I. 特別支援教育に関する講義について質問します。該当するものに「✓」を付けてください。

①特別支援教育に関する講義への受講の動機として最も当てはまるものを選んでください。

- 特別支援教育に関心があるから
- 教員になって必要となる知識だから
- 単位を取らないといけないから
- その他 ( )

②特別支援教育に関する講義で取り扱って欲しい内容を一つ選んでください。

- 各障害に関する知識や理解
- アセスメントの方法
- 困難場面における手立て
- 特別支援教育の歴史や制度
- 思いつかない・分からない

II. あなたの特別支援教育に関する認知度を質問します。記入例に従い、該当するものに「✓」を付けてください。

No	項目	理解している	聞いたことがありイメージできる	聞いたことがあ るが具体的にイ メージできない	知らない	接触経験がある
	記入例		✓			✓
1	視覚障害					
2	聴覚障害					
3	知的障害					
4	肢体不自由					
5	病弱					
6	言語障害					
7	情緒障害					
8	自閉症スペクトラム障害					
9	学習障害					
10	注意欠陥多動性障害					
11	特別支援教育					
12	ICF(国際生活機能分類)					
13	ノーマライゼーション					
14	インクルージョン					
15	アセスメント					
16	個別の指導計画					
17	個別の教育支援計画					
18	校内委員会					
19	特別支援教育コーディネーター					
20	巡回相談					
21	知能指数					
22	通級による指導					
23	特別支援学校					
24	特別支援学級					
25	就学相談					
26	交流教育					

Ⅲ. 特別支援教育の学びについて質問します。該当するものに「✓」を付けてください。

①特別支援教育について学ぶときの情報源は何ですか？（複数回答可）



IV. 障害児・者のイメージや接触経験について質問します。該当するものに「✓」を付けてください。

①障害のある同級生がいましたか？

- はい                      いいえ

「はい」と答えた方で、差し障りがなく、障害名が分かる場合はご記入ください。

②障害児・者に対するイメージはどのようなものですか？最もあてはまるもの一つを選んでください

- 明るい      暗い      素晴らしい      気の毒な      努力家  
優秀な      苦しい      その他（                      ）

③大学入学前と現在を比較して、障害児・者へのイメージは変化しましたか？

- 変化した      少し変化した      あまり変わらない      変わらない

⑤④で「変化した」「少し変化した」を選んだ方のみ質問します。イメージが変化した契機・要因について最も影響が大きかったと思われるもの一つを選んでください。

- 身近な障害児・者      社会の中の障害児・者      大学の講義      テレビ  
サークル活動      インターネット      本・雑誌      教員・知人  
ボランティア活動      教育実習      その他  
(                      )

⑥障害を持つ児童・生徒の担任になることについてどのようにお考えですか？

- 抵抗がない      あまり抵抗がない      少し抵抗がある      抵抗がある

もしよろしければ理由をご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

平成 28 年 4 月 13 日 北海道教育大学札幌校 特別支援教育専攻  
准教授 齊藤 真善